
魔界の姫と緑園の王子【 2 】

優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界の姫と緑園の王子【2】

【Nコード】

N0683Q

【作者名】

優姫

【あらすじ】

人間界から魔界に来て1ヶ月が過ぎ。ルーンとヴィルは「婚約」という事で一緒に魔界城で暮らしていた。ある日ルーンの元に小さい頃良く遊んでいた従兄弟が現れ……。

魔界の姫と緑園の王子

「ヴィル？ヴィル？？」

「どうしたの？ルーン。」

ルーンは熱を出して苦しそうにヴィルを呼んだ。

「まったく。湖に遊びに行くのは良いけど。水の中に入ったりするから風邪を引くんだよ？ルーン」

「・・・入ったんじゃないもん・・・転んだんだもん・・・」

ルーンは頬を膨らませ唇と尖らせた。

何故ルーンが風邪を引いたかというと

午前中

「ヴィルー！お外で遊ばー！綺麗な湖があるんだよー！」

ルーンはそう言いながらヴィルの腕をひっぱった。

「わかった、わかった。行こう。そんな腕をひっぱらなくても大丈夫だよ。」

人間界にあるヴィルの故郷ランゲールから魔界に来て早ひと月がたった。

ヴィルはすぐ魔界での生活に慣れ始めた。

外に出たルーンとヴィルは城付近にある大きな湖まで手を繋いで歩いてきた。

そこにはあたり一面空の色を写した真っ青で綺麗な湖が広がっていた。

「うわあ。本当に綺麗なところだね？ルーン。魔界にもこんなところがあるのかぁ・・・。」

「？魔界にも？人間界では魔界はどんなところだと思われているの？」

湖の水を触りながらルーンはヴィルに聞いた。

「そうだなあ・・・空はいつも曇ってて空気が淀んで水とかも濁ってて城とかも茂ってて・・・暗いイメージがあつたかな」

「・・・。魔界はそんな暗い所じゃないよ？」

「うん。それが間違っていたことはここに来た時にきずいたよ。」

「良かったあ！」

そう言いながらルーンは立ちあがろうとすると足元にあつた小石を踏みつけ

「え・・・、わつとつとつとつと!!!!」

ドボン!!!!!!!!!!

という音が鳴り響いた。

そして今に至る。

「ヘクシュツ!!!!」

「大丈夫!? ルーン」

心配そうに顔をのぞかせてくるヴィル。

「だ、大丈夫だよ。心配しすぎだよ。」

頬を真っ赤にしながらルーンはヴィルに笑顔を見せる。

「・・・ルーン。少し眠いな。ずっとここにいるから。」

「・・・本当？」

「約束するよ」

そう言いヴィルはルーンの寝台横にある椅子に腰かけルーンの手を握った。

ヴィルの手の温かみを感じルーンは安心したのかゆっくりと瞳を閉じた。

（「良い? ルーン。東にある塔には絶対に行つてはダメよ?」

「なんで? 母様?」

幼いルーンは愛する母の膝の上で母の顔をのぞくようにして聞いた。

「あそこには禁忌のものがたくさんあるからよ」

「きんき??」

「うーん。使ってはいけない物・・・かしら？だから絶対に入ったらダメよ？」

「・・・はあ~~~~い！」

その後母はまた体調を崩し寝込んでしまった。母が寝込んでいる間にルーンは東の塔へ足を運んだ。

「・・・扉・・・ここ？」

幼いルーンは「ダメ」と言われたら逆に入りたくなってしまったのだ。

母よりも父よりも大きな扉をルーンは「うんしょっ！うんしょっ！」と言いながら扉を開けた。

ギギイイイイイ

と怪しげな音をたてながら扉は開かれた。

「うわ・・・あ。」

中には見た事もないくらいの本が並べられていた。ルーンは部屋の中へと足を進め色々な本を手にとっては開いてみた

「・・・読めない・・・」

でも、本の中は見た事もないような字がびっしり書かれていて幼いルーンにはまだ読めなかった。

ルーンは読むのを諦め中を探索することに集中した。

部屋の奥へと足を進めて行くと不思議な感覚がルーンにまとわりついていた。

「・・・？」

ルーンはその感覚のまま奥へと入って行くと黄金色に光を放ち輝いている1冊の本を見つけた。

「本が光ってる???」

ルーンは本を手にとると開いてみた。

「き・・・んきの・・・まほう・・・？あれ？私なんで読めるの？」

他の本は読めなかったはずが黄金に光っているその本の中の字だけはルーンには読むことができた

「きんきのまほう・・・母様が言ってたまほうかな？ええ・・・と・

・・「生き返らせの魔法」？なんだろう、それ」

幼いルーンにはまだ言葉の意味がよくわからなかった。）

「ん・・・。。。。夢・・・？」

目を覚ましたルーンは片手で目をこすった。そして腰を起こそうとするともう片方の手を動かせない事にきずきその手の先を見ると手にはヴィルの手が重なっていた。

ヴィルは椅子に座ったままウトウトしていた。だからかルーンが目を覚ました事にもきずいていないようだった。

（ずっと・・・ここにいてくれたのかな・・・？）

ルーンはヴィルを起こさないように手をヴィルの手から自分の手を離そうとするが、力いっぱいで掴まれているのか振りほどけなくルーンは仕方なくヴィルを起こす事にした。

「ヴィル？ヴィル？」

ルーンは

繋がれている手を軽くひっぱりながらヴィルの事を呼んだ。

「ん・・・？あ、ルーン起きたの？体調は？大丈夫？」

ヴィルは目を覚ますとすぐルーンに体調を聞いて心配してきた。

「大丈夫だよー。あの、起きたいんだけど・・・手・・・」

「わわ！！ご、ごめんね！」

そう言いながらヴィルは手を離すとすぐルーンの腰に手を入れ、ゆっくりと腰を起こすのを手伝ってくれた。

ルーンが起き上がると同時に部屋の扉が大きな音をたてて開け放たれた。

バーン！！！！

「ルーン！！！！熱を出したんだって！？大丈夫かい！？」

扉のところに立っていたのは幼い頃よく一緒に遊んでくれたりした従兄弟のロナルド・クルフだった。

魔界の姫と緑園の王子

「陛下から早馬がきてね。君が湖に落ちて風邪を引いたと聞いてね。飛んできたんだよ。」

息を絶え絶えしながらも言葉を発するロナルド。

「ところで……」

と言いながらロナルドはルーンのベッドの枕元にある椅子に腰かけているヴィルの方に視線をやった。

「え？……あ、そっか。ロナ兄は知らないんだ。」

「ルーン。こちらの方は？」

ヴィルがルーンの方を見やり質問したらロナルドが怒るようにヴィルの方を睨んだ。

「お前に聞いていない。今は私がルーンに質問をしている。それで？ルーン。この男は誰なんだ？」

ロナルドはそう言い視線をルーンに戻した。

そしてルーンは1月前まで自分が人間界にいたことを話し、そして婚約者でもあることを話した。

そして、ロナルドの返事を待たずにルーンは今度はロナルドの事をヴィルに話した。

「ヴィル。この人は私の従兄弟でね。ロナルド・クルフっていうの。小さい頃良く一緒に遊んでくれた私のお兄ちゃん的存在なの。」

「そうなんだ。よろしく。ロナルド・クルフさん」

そう言い。椅子から腰を上げたヴィルはロナルドの方まで行き手を差し出した。

ロナルドはそれを無視しルーンの近くまで歩み寄った。

「陛下から一応話は聞いてはいたが……まさか本当だったんだね。」

そしてルーンの頭を愛おしそうに撫でた。

「父様つたら……ただの風邪なのにロナ兄をわざわざ呼ぶなんて

！
」

「心配なんだよ。許しておあげ。」

そう言いながらロナルドはルーンを撫でる手を止めようとはしない。そんなロナルドを扉付近から見ていたヴィルは何かに気付いたように少し目を見開いてみせた。

「へくしゅー！！！」

ルーンが大きなくしゃみをする

「大丈夫！？」

とロナルドとヴィルの声が重なった。

「つつ！」

ロナルドは忌々しい物を見るような目でヴィルを見た。ヴィルはそんな視線には気付いてもいないのかそのままルーンの寝台に駆け寄りロナルドとはまた逆の方へと回ってルーンの顔色をうかがっている。

「二人の声重なった！大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、二人とも。」

ルーンはそう言いながら鼻をススった。

その時

コンコン。

「姫様お食事をお持ちいたしました。」

扉の向こうで侍女の声が聞こえた。侍女がそう言つと扉を開け寝台近くにあるテーブルに食事を乗せたお盆を置いた。

「ありがとう、イリアナ。」

「さあ、早くお食事を済ませお薬をお飲み下さい。陛下が心配なさつておられましたよ。ロナルド様ちよつと失礼いたします。」

そう言うといリアナはロナルドの横を歩きルーンの枕元に立った。

そしてルーンの背に手を添え支え起してくれた。

「今日のお食事は人間界でいう「お粥」という食べ物でございます。先ほどヴィル様が直接厨房にいらつしゃいまして、風邪を引いた者にはお粥のほうが食べやすく消火にも良いと教えていただいたので

コックに作らせてみました。」

「つつ！そんな物・・・！」

そんな物ルーンに食べさせるな！人間が食すものなど！

！とロナルドが言いかけると。

「わあ！本当に！？ありがとうヴィル！」

満面の笑顔でヴィルに礼を言うルーンを見てロナルドは言葉を飲み込んだ。

「いいえ。お粥食べて薬飲んで早く元気になってね。そしてまたどこか出かけよう？魔界の色んなところに連れて行っておくれ。」

ヴィルも笑顔でそう言う「うん！」とルーンが元気良く答えた。

その後ルーンはおいしそうにお粥を全て平らげ薬の中に入っている眠り薬のせいかすぐに眠気が襲ってきて目をこすり始めた。

「ルーン眠いのだろう？無理しないでお眠り。たくさん寝ないと治らないよ？」

「う・・・ん・・・。ヴィル・・・また傍にいてくれる・・・？」

「うん。いるよ。大丈夫だから、ね。」

「ロナ兄も・・・いてくれる・・・帰っちゃう・・・？」

ルーンは寝台の端に腰を下ろしているロナルドの方を見やり質問した。

「・・・ああ。大丈夫だ。ここにずっといてやる。」

「じゃあ寝る！」

そう言うルーンは布団で顔を半分隠して目を閉じた。

数分後静かな室内にルーンの寝息だけが聞こえ始めた。それと同時にロナルドが口を開いた。

「どういうつもりだ。」

「はい？」

ヴィルがそう答えるとロナルドは今にも殺してしまいそうなほど鋭い目つきをヴィルに見せた。

「ルーンの婚約者とは一体どういいうつもりだと聞いている。狙いはなんだ？魔界の王の座か？」

「いいえ。私は魔王の座など興味はありません。」

ルーンの頭を撫でながらヴィルがそう言うと、ロナルドはヴィルを睨む瞳を少し細めてまた問いただす。

「では何が狙いだ？魔界でしか取れぬ宝石か？それとも魔石か？」

「いいえ。ルーン以上に欲しい物などありません。」

ヴィルがルーンの頭を撫でながらにそう言うとロナルドは齒ぎしりさせた。

「ルーンは魔界の宝石だ。宝石を人間のような薄汚い者などにくれてやる気はさらさらない。ルーンの事は諦め人間界に帰れ。帰り方がわからぬのなら私が道を開いてやろう。」

ヴィルはルーンを撫でる手を止めロナルドの方を見た。

「申し訳ありませんが。私はルーンを手放すつもりはありません。なので帰り道を開いてもらう理由はありません。」

「つつ！魔族の中に人間の血を入れるわけにはいかんだ！貴様はそつこく人間界に帰れ！ルーンにはそれ相応の結婚相手が設けられるはずだというのに貴様が邪魔をしているのだぞ！」

とロナルドは小声ながらも少し怒鳴るようにして言葉を嚙む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683q/>

魔界の姫と緑園の王子【2】

2011年2月19日15時13分発行